

地域文化部門 講評

国立歴史民俗博物館 名誉教授 常光 徹

口団体の部

優秀賞

「みなべ・田辺の梅システム 400 年とこれから」

和歌山県立田辺高等学校 みなべ・田辺の梅システム研究会

高品質の梅を数百年にわたって生産し維持してきた「梅システム」とは何か、について考察したもの。薪炭林・梅・生物多様性の3つの観点から解明を目指している。史資料を駆使して紀州備長炭の歴史を描き、炭の生産工程を詳細に報告。梅についても、南高梅が誕生するまでの歴史を押さえた上で、現地調査をもとに白干し梅の作り方を詳しく説明。一見、関係ないかに見える梅畑と周囲の薪炭林が、実は相互に影響し合って生物の多様性を育み、土壌の流出防止や有機物補給の役割を果たしてきた。長い歴史を紡いできた梅システムの背景を明らかにした力作。

優秀賞

「未来へつなぐ地域資源～伝統食材の保存と普及を目指して～」

群馬県立勢多農林高等学校 植物バイオ研究部

地域の伝統文化を生かして、高齢化の進む町の活性化に取り組む活動の記録である。かつて本研究部が発見した在来のアカジャガや、地元で栽培されてきたアワバダイズに注目し、これらが郷土料理としてどのように利用されてきたのか、農家を訪ねて調査を実施。それをもとに、料理教室を開催して具体的な検討を進め、新たな工夫を凝らした新商品の開発を試みている。伝統食材の継承と創造といってよい。広く普及するための実践も多彩である。また、伝統的な農具の調査や、安定した収穫を得るための栽培技術についても述べられていて、読み応えがある。

佳作

「2019 年度 地理歴史部民俗調査 東白川村」

奈良県・帝塚山高等学校 地理歴史部

岐阜県加茂郡東白川村の民俗調査にもとづく報告書である。全体は、1 廃仏毀釈、2 地歌舞伎、3 農業(お茶・トマト)、4 林業、5 畜産、6 年中行事、7 その他(村の概要・村おこ

し・教育)から構成されている。周到的な下調べをした上での調査だけに、いずれのテーマも内容が充実している。なかでも、木曽を代表する林業については、江戸時代から現代までの歴史を詳細に記述し、今日の東白川村が置かれている厳しい現状と、新しい展開を模索する状況を描いていて興味深い。

佳作

「知られざる北伊豆地震と朝日町長～朝日町長の対応は復旧ではなく復興だった～」

静岡県立沼津城北高等学校 情報メディア部 災害研究班

1930年に発生した北伊豆地震は、静岡県東部に甚大な被害をもたらした。三島町(現三島市)は、どのような復興の道を辿ったのか。その舵取りをした朝日原作町長の対応に注目したレポートである。地震に関する詳しい記述から、深刻な被害状況が読み取れる。朝日町長は、家屋の倒壊を機に道幅を一挙に広げるなど、単なる復旧ではなく、町の将来を見据えた大胆な構想を打ち出す。反対する住民もしだいに心を開いていく。朝日町長の情熱と実行力が伝わってくる内容である。

〇個人の部

最優秀賞・折口信夫賞

「屋久島民謡『まつばんだ』を後世に伝える方法」

鹿児島県立屋久島高等学校 寺田雅

忘れ去られようとしている民謡「まつばんだ」を、身近に感じてもらうにはどうすればよいのか。方法を模索しながら、実現に向けて活動してきた記録である。アンケートの分析から、民謡に対する人々の意識を分析し、その実態を浮き彫りにする手法は鮮やかである。インタビューでの意見を参考にしながら、住民の生活に寄り添い自然な形で伝わっていく方法が大切であると確信する。親しみやすさを念頭に置いた楽譜や音源の工夫、町内放送で流すための働きかけなど、計画を行動に移していく実行力は見事である。視覚が優先する現代に、故郷を聴覚に刻み込む取り組みとあってよい。

優秀賞

「『無尽』がつくる山梨のコミュニティを探る」

山梨県立甲府東高等学校 竹井愛

日頃見聞きする「無尽」について、その仕組みや活動の実態、山梨県民の特徴などについて

て調べたものである。参加者への聞き書きだけでなく、毎月の会合の場を提供している食堂の経営者から見た無尽の姿を描いていて興味深い。無尽の機能として、人がつながって生きることを満たす絶好の機会であり組織である、という指摘は示唆に富む。無尽は山梨県でとくに盛んだが、ただ、参加者は減少しているという。今日の無尽が抱える課題と今後の展望が具体的に示されている。愛さんのお父さんも参加しているという、身近な話題に取り組んだ着眼点が良い。

優秀賞

「わんどの津軽の楽器の魅力は知ってげじゃ」

青森県・五所川原第一高等学校 古川弥音

津軽三味線誕生までの歴史と、津軽三味線の演奏に携わっている若者たちの現状を報告している。中国から渡来した三弦が琉球王国で三線となり、さらに堺に伝えられ、三味線が誕生するまでの歴史を述べ、三味線の種類と特徴を分かりやすく説明する。つぎに、津軽三味線誕生のきっかけとなった仁太郎の不屈の人生を描く。現在、各地で津軽三味線を弾いている若者たちへのインタビューでは、始めたきっかけ、その魅力、津軽三味線から学んだことなどを紹介していて充実している。古川さんの津軽三味線に寄せる熱い思いが伝わってくるレポートである。

佳作

「夏の写し絵」

岐阜県・済美高等学校 森幸成

文久2年(1862)の麻疹の大流行時に作られたはしか絵を読み解き、これらの錦絵が伝えようとしたものは何か、を考察したもの。麻疹の流行に対峙した幕末と、新型コロナウイルスの感染に直面する現代を比較し、治療法の確立されていない感染症に対する共通の心意を浮き彫りにしている。未知の病魔が引き起こす危機は、しばしば差別を生む。根絶することはできないかもしれないが、傍観したり諦めてはならないと主張する。はしか絵を素材にして現代を考える発想が新鮮である。

佳作

「神社は地域を活性化させる事ができるか〜埼玉県志木市敷島神社のケース」

東京都・渋谷教育学園渋谷高等学校 岡田真奈

タイトルが本レポートの主題を端的に物語っている。この問いを解くために、神社の歴史や地方の現状、地域活性化の問題点などを手際よく整理する。その上で、敷島神社の関係者

に夏祭りについてインタビューを実施し、祭りを支える人々の活動を描いている。人と人との繋がりや協力関係の大切さがよくわかる。こうした手続きを経て、活性化は「地域住民の精神的豊かさの創造という面で可能である」との結論を導き出している。構成がしっかりしていて文章もわかりやすい。

佳作

「温故知新一埼玉県秩父市の伝統文化から考える一」

東京都・海城高等学校 島村昂寿

秩父市の伝統文化とアニメの「聖地巡礼」に代表される現代文化は、相互の関係性のなかでどうあるべきか、について考察したものである。一章で、秩父夜祭と秩父神社を中心に詳しく解説。二章では、秩父を舞台にしたアニメと「聖地巡礼」による観光の現実を報告。それを受けて、三章では、伝統文化を現代にどう生かすべきか、守るべきものと変化していくものに、自覚的に向き合う姿勢の大切さを述べている。不易流行に通ずる見方といってよい。文章も簡潔で読みやすい。

□総評

新型コロナの影響で日々の行動が制約されるなか、応募状況が心配でしたが、今回も質の高い作品が揃いました。団体の部優秀賞の田辺高等学校「みなべ・田辺の梅システム 400年とこれから」は、梅と炭という一見異質なものの間に機能しているシステムに注目した考察で、民俗文化を捉えていく大切な視点といえるでしょう。個人の部最優秀賞・折口信夫賞の寺田雅さんの「屋久島民謡『まつばんだ』を後世に伝える方法」は、アンケートを分析する高い能力と、それを実行に移す行動力が光る内容です。昨年の中島渚君につづいて、屋久島の民俗を対象にした大きな成果です。森幸成君の「夏の写し絵」には、はしか絵を素材に現在を読み解く鋭い視点を感じました。民俗学の根底には、私たちの目の前にある疑問や関心が横たわっています。伝承といういとなみに注目しながら、歴史的な移り変わりの姿や、そこにこめられた人々の知恵・技術・心意などを明らかにしていくところに特徴があります。これからも、身近に生起する出来事に関心を持って取り組んでください。